



ていたということなんですよ。辞書に今でも載ってるんです。

3番目のイメージは何かといたら“迫害民族”ですね。

アウシュビッツの強制収容所とか『アンネの日記』であるとか、約600万人のユダヤ人たちが虐殺されたとも言われているわけですが、ナチス・ヒトラーによるあのユダヤ人迫害だけがユダヤ人の迫害ではありません。

ユダヤ人の迫害って、いつから始まったと思いますか？

ユダヤ人が存在し始めた時、存在した時からずっと続いているんです。

特に国を失ってから、世界中で惨憺たるところを通って来るわけですよ。

しかも、滅びてしまったのではなく、サバイバルした民族ということですよ。

大体この3つのイメージが強いんじゃないかと思いますが、もう1つ忘れてならないのは、このユダヤ民族から出た最も偉大な存在がおられる。それはイエス・キリストです。

イエス・キリストはユダヤ人ですよ。

ですから、反ユダヤ主義、“ユダヤ人なんかいなくなっちゃえ”というのは、イエスが所属した民族を否定するということでもあるんですよ。

このユダヤ民族、いったい始まりはどこから来たのかと言いますと、アブラハムという人物から始まったということを第1回目でお話し致しました。

神がアブラハムを選んで、そして、アブラハムに語りかけて行くんですよ。

何のために語りかけたかと言いますと、また、なぜアブラハムを選んだかと言いますと、アブラハム以外の全ての民族は、神が語りかけても“創造主なんかいない”という世界観で生きていますので、聞く耳持たないんです。そこで、神の言葉に対して聞く耳を持っているアブラハム一族を通して、神は全民族に語りかけようとしたんですよ。

つまり、神様がアブラハムを選んだというのは、アブラハム一族だけをえこひいきして愛してるというんじゃなくて、それ以外の全ての民族に、アブラハム一族を通して、“神はあなたのことを愛しているよ。創造主は唯一なんだよ”ということを伝えるために、彼を選んだということなんです。

ですから、アブラハムはそのような崇高な使命を受けて、カルデアのウル、現在のイラクから今のイスラエルまで移住したんですよ。移住した時75歳。

奥さんと甥っ子と、そして、使用人たちと家畜を連れて海外移住をしたんですが、移住先でアブラハムが、例えばこういう風に言ったとして、どういう風に人は聞くでしょう？

「皆さん、聞いてください。私の前に創造主という本物の神が現れて、お告げを告げてくださいました。この創造主こそは本当の神です。皆さんが信じている偶像はニセモンです。」

もしそんなことを言ったら、「何を寝ぼけたこと言ってんねん。このよそ者が！」ということで、袋叩きにあうか、或いは無視されますよ。こんな小さな家族の80前の爺さんが「神が私に現れた。その神が本物なんだ」とか言っても、誰が耳を貸しますか？

普通だったら耳を貸さないし、誰も彼の言うことに対して同意する者はないと思いますよ。

ところが不思議なことに、アブラハム一族・アブラハムと関わった人たちは皆、アブラハムの神を信じるように変えられていくんですね。アブラハムの神を認めるように変えられていくんです。

なぜ、このおじいさん一家がこんなにも大きな影響を持つようになったのかと言いますと、アブラハムと関わった人たちは、アブラハムに与えられた神の契約を自ら体験したり、見聞きするようになるからなのです。

創世記 12 章に、アブラハムに対して語られた神の言葉が記録されているんですね。

わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者をのろう。地のすべての部族は、あなたによって祝福される。(聖書 新改訳 2017)

『あなたを祝福する者は祝福される』とは、アブラハムに好意的な者は、不思議にいいことが始まるんです。アブラハムに良くしてやると、良いことが返って来るんですね。

ところが、アブラハムを冷遇したり、いじめたり、迫害したりするならば、それをした当人は酷い目にあう。

そのことを通して、“不思議だな。どうも、彼と関わると不思議なことが起こるぞ。良くしてやると良くされるし、酷い目にあわすと もっとこっぴどい目にあうんだ。彼が信じている神は本物で、今も生きておられる方ではないのか”ということが段々段々広がっていくんですね。

アブラハムの奥さんはサラというんですが、彼女は異母妹なんですね。お父さん一緒、お母さん別。妹なんです。妹と結婚してるんですね。サラという人は大変美しい女性であったのです。

ある時、飢饉でアブラハムはエジプトに身を寄せるのですが、その時、エジプトの王様/ファラオはこの美しい女性 アブラハムの妻を見初めるわけです。

そして宮廷に呼んで、妾にしようとするんですが、サラが宮廷に呼ばれる時、アブラハムは「やめてください！ 私の妻なんです！」と言やいいのに黙ってるんですよ…。

何で黙ったんでしょう？ 怖かったんですよ。自分は寄る辺のない寄留者に過ぎない。

向こうは大国エジプトの絶対権力者ですよ。怖くて勇気がなくて言えなかったんですが、しかし、サラがエジプト ファラオの宮廷に入るや否や、この宮廷に次々と災難が降りかかって来るんです。

“どうもおかしい。何でこんな事が起こったのか？”ということで、やがてファラオの目が開かれまして、“アブラハムの妻を召し入れたからだ。”

彼女を解放するんですね。その途端、災難がピタッとやむんです。

この事件は、ハッキリ言ってアブラハムが悪いですよ。というのは、ファラオは人妻だと分かった上で召し入れたのではなく、知らないで、アブラハムの妹だと言われて召し入れたんですよ。

悪気があってしたことではないにもかかわらず、それがアブラハムにとってマイナスになる・ダメージになることなら、創造主はエジプトにダメージを与えて、一線を超えないようにしたということですね。『あなたを呪う者はのろわれる』ということなんです。

この事件から約 400 年後、アブラハムの子孫たち、アブラハム・イサク・ヤコブの子孫、ユダヤ人たちは、エジプトで奴隷状態になっておりました。朝から晩までこき使われるんですね。

そして、どんどん人口が増えていきます。

その当時のエジプトのファラオ/王様は、ユダヤ人の助産婦たちに命令を下しました。

“もし生まれて来たのがユダヤ人の男の子であった場合、ナイル川に投げ入れて溺死させろ。女の子は生かしておいていい。でも、男はナイル川に投げ入れて、溺れ死にさせてしまえ。”

助産婦たちは言うこと聞かなかったんですね。言うこと聞かなかった助産婦には、次々と良いことが起こるんです。そして、溺死させてしまえと命令したファラオは、紅海の海の中で溺死するんです。つまり、ユダヤ人に対して企てた悪が、そのまんま自分に返って来るんですねえ。この『ユダヤ人を呪う者はのろわれる』という原則は、現在に至るも有効なのです。

ところで今、世界中の国際共通語は英語ですよ。

英語ができれば、30億人以上の人々と通じることが出来ると言われてますよね。

あの小さな島国にいてるあの人たちが語っている言葉が、何でこんなに世界中に流通しているのか？かつて、イギリスが七つの海を支配していた頃があったからです。

あの小さな島国が、100年余りに渡って、世界の覇権国家として君臨していたんですね。

どうしてあんなちっこい国が、世界の覇権国家として、トップに上り詰めることが出来たんでしょう？ 鍵はユダヤ民族なのです。

1875年・19世紀の後半、大英帝国はユダヤ人を首相にするんですね。

首相になったのは1875年ではありません。しかし19世紀の終わりに、ベンジャミン・ディズレーリというユダヤ人政治家をイギリス政界のトップに据えるんです。

これは当時のヨーロッパから考えると、もう本当に思い切ったことなんです。

当時ヨーロッパ大陸で、ユダヤ人は既に色んな成功を収めてるんですけど、その成功は芸術分野とか経済の分野に限られているんです。政治の世界でユダヤ人が活躍する余地はなかったんです。

というのは、ユダヤ人たちは国を失って色んな所を彷徨っている。流浪している。

だから、特定の国に忠誠を尽くすということが考えられない。信用されなかったんですね。

ユダヤ人を政治の世界に入れるというのはタブーの中のタブー。

ところが大英帝国は、このベンジャミン・ディズレーリという人物を首相にしたのです。

ディズレーリは Disraeli という綴りなんですね。

“イスラエルから来た人”というのが、この姓が持っている意味です。

ユダヤ人血統を持っている人物を首相にしたということが、大英帝国絶頂期を迎える決定的な契機となっているのです。

1875年、スエズ運河の株の買収に成功するんですね。

スエズ運河というのは、アジア大陸とアフリカ大陸の間にある地峡に繋がっている運河です。

この運河が出来るまでは、イギリスとアジアを繋ぐ航路はアフリカの喜望峰回り。

アフリカ大陸の1番南まで行って、遠回りしないとアジアに行けなかったんです。

でも、スエズ運河が出来て、そこを通ると、地中海経由して即アジアに行ける。

ものすごい航路の短縮・ショートカットが出来るんですね。

ところが、1つ問題がありました。

スエズ運河の株をヨーロッパで持っていたのがフランスだったんです。

当時、イギリスとフランスはメチャクチャ仲が悪い。ライバル国ですよ。

もしフランスがイギリスの船舶を限定して、“お前らの船はスエズ運河を通してやらない”と阻止されたら、アジアにあるイギリスの植民地は孤立化することになるのです。

スエズ運河こそは、イギリスの生命線の中の生命線と言ってもいいでしょう。

その生命線を握っているのが、ライバルであるフランスだったんですね。

さて、1875年のある日曜日のことです。ディズレーリはロスチャイルド家の晩餐会に招かれてたんですね。ロスチャイルドもユダヤ人です。ディズレーリもユダヤ人で、彼らは古くから付き合いがあったんですね。「日曜日、お食事にどうですか」ということで。

食事をしている最中、ロスチャイルドの元に1本の電報が届くんです。

それはフランス・ロスチャイルド銀行の関係者から送られて来た電報で、その内容はこうでした。

“エジプト第2国王が、自分が持っているスエズ運河の株を全部売却したいと言っている。

そして、それを全部フランスに買い取ってもらいたいと申し出ている。にもかかわらず、フランス政府は未だそれを受諾していない。”

この電報をロスチャイルドはディズレーリに見せたんですね。

それを見たディズレーリが、その場で「この株式を買い取ろう！」と決めたのは言うまでもありません。と言いますのは、エジプト第2国王が持っていた株式総額は、フランスが持っている株式数よりも上だったんです。これを買取ることによって、イギリスがスエズ運河の筆頭株主に躍り出ることになるのです。スエズ運河の筆頭株主になるということは、ヨーロッパとアジアの最短距離をかうのと同じことなんですね。

いったいいくらなんでしょう？ 400万ポンドなんですよ。400万ポンドという天文学的なお金。

ディズレーリはお金がなかったんです。この時、イギリス国会が休会中なんです。

イギリス国会が休会中の時は、イングランド銀行と言えども、議会に融資することは出来ないという法律があったんです。

事は一刻を争うんです。そこで、ディズレーリはロスチャイルドに言いました。

「400万ポンド、融資してくれ。」するとロスチャイルドが「担保は何ですか？」「大英帝国。」

この結果、スエズ運河はイギリスが筆頭株主になり、それを支配するものとなったのです。

このお陰で、ディズレーリは男を上げたんです。 “英断だ！” “なんと素晴らしい指導者だ！”

彼は人気沸騰。そしてロスチャイルド銀行は、莫大な金利をイギリスから得ることが出来るようになりました。しかし、最も恩恵を受けたのはイギリス国民です。

スエズ運河を握ることによって、計り知れない富がイギリスに流れ込むようになったからです。

つまり、ユダヤを祝福する者は祝福されたのです。

この聖書の原則は、現在に至るも働いています。

聖書の言葉はそのまんま、今の世界の動きにも働いているということなんですね。

不思議なことではありませんか。

もしこのトピックスについてご関心がある方は、私は別の動画で約2時間、このことについて解説しています。東住吉キリスト集会のYouTube動画 #16『歴史の謎を解く鍵 ユダヤ人とバイブル』。これは同志社大学でやった講演ですが、今まで130万回見ていただいているという動画でございます。もしご関心がある方は、是非そちらの方も参考にいただければとっても嬉しいです。

それはともかくとして、ユダヤ民族を知ることによって、ユダヤ民族を選んだ創造主がおられる。それは人類共通のルーツであり、あなたの作者でもあり、そして、目には見えないけれども創造主がおられるということ、目に見える歴史を通して知ることが出来るということなのです。

いかがでしょうか。

あなたをお造りになった創造主、ユダヤ民族を語る聖書を通して、どうぞ一層深くお知りになってください。

それではまた、この『ごうちゃんねる』でお目にかかりましょう。さよなら！